

受け継いでいく水

奈良市立都祁中学校 三年

宮久保 晴加

四月、通学路の両側に、しろかきの終わつた田んぼが広がる。水面は、木々の青葉や山桜、周囲の家々を鏡のようにくつきりと映し出し、朝日が当たれば、きらきらと輝く。わたしは、さわやかな気分で自転車をこぐ。

「この辺は、『友田白石碁盤のおもて、なぜに裏毛が取れぬやら。』と昔から言うんや。」と祖父は言う。水田の広がる風景は、確かに碁盤のように平らだ。標高四百メートルの涼しい高原なので、二毛作は無理だが、空気も澄み、水もきれいで、昔から米作りが盛んだ。お米はおいしく、町からわざわざ買いに来る人もいるくらいだ。

ところで、この米作りはいつ頃始まったのだろうか。祖父はこう言った。「江戸時代に新田開発をしたときに、一緒に

大きなため池も作ったそうや。大池のそばの石碑に掘ってあるから見てき。」

保育所からの帰りに見る大池を、初め、わたしは海だと思っていた。冬には鴨が泳ぎ、祖父が子供の頃は、凍った池の上でスケートができたそうだ。自転車で見に行くと、草むらの中に石碑があった。

「寛永五年藤堂藩城和奉行加納藤左衛門直成の差図により友田村庄屋三右衛門以下村人協力一致この大溜池を築造す」、「築造三百五十年記念に祖先の偉業をたたえて建造す」

「寛永」、どこかで見た文字だなと思い、歴史の教科書を開いた。すると、江戸の三代将軍、徳川家光の時代で、島原天草一揆が起こつたり、寛永通宝が作られたりした時だと分かった。ブルドーザーやショベルカーなど

の重機もない大昔だ。「村人協力一致」とあ
るから、村人が大勢集まって、くわやすきを
使って掘ったのだらうか。一体どれくらい
年月がかかったのだらう。江戸時代には何
度も干ばつや日照りによる飢きんが起こつた
習った。米作りには大量の水が必要だ。きつ
と村の人たちは安定した農業用水を確保す
るため心を合わせ、「協力一致」したのだらう。
今から四百年近い昔の風景が目に浮かぶよ
うで、祖先がとても身近に感じられた。

この辺りでは、ゴールデンウィークはレジ
ヤーのための休暇ではなく、一家総出で田植
えをする期間だ。遠くに住んでいる人もわざ
わざ帰ってきて手伝うので、田んぼはとて
もにぎやかだ。わたしの家も、祖父母だけ
でなく、父母や兄たちも手伝う。わたしも
部活動から返るとすぐ、体操服のまま苗を
育てたトレイを水路で洗う。今年の田植
えも無事終わった。祖先の苦労があつた
からこそ、水不足の時も農業用水が確保
され、今まで米作りを続けてこられたのだ
とつくづく思う。数年前のことだが、この
大池に工場排水が流れ込むかもしれないと
聞いて、村の人々が

一丸となつて抗議し、防ぐことができたとい
うことがある。一度汚染された水はなかなか
元には戻らない。祖父も、水が汚染されたら
お米が作れなくなると、必死だった。石碑に
刻まれることはないけれど、村人が「協力一
致」して、この大池を守ったのだ。

わたしは、石碑の周りに草がぼうぼうと生
えているのが気になつた。石碑が建てられて
もう四十年近く。どれだけの人がこの石碑の
ことを知っているのだらう。わたしも祖父に
聞くまで、全く知らなかつた。でも、知つて
からは水と農業を守つた祖先の多大な苦労を
忘れず、これからも水田の広がる風景を守ら
なければならぬと思ふようになった。

石碑に刻まれた「協力一致」という言葉。
これこそが今、すべての人類に必要な言葉な
のではないだらうか。水は地球上を循環し、
地球に住むすべての生き物の命を支えている。
自分さえよければと思ふのではなく、世界中
で「協力一致」の精神を持ち、限られたみん
なの水が無駄遣いせず、汚さず、未来へと受
け継いでいかなければならないのだ。